

## 『呪われた部分』（バタイユ・ちくま学芸文庫）

- ・引用文は、ほとんどの場合、縮約している。
- ・【 】と■は、加藤の補足・連想

## 第五部 現代のデータ

## 第1章 ソヴィエトの工業化

## 第1節 非共産主義側の人類の嘆き

- p224 ベル・エポック(19世紀末～第1次大戦前)以降、【とりわけ第2次大戦後の経済的困窮を前にして】、劣等感が人の心をむしばんでいる。唯一の例外は共産主義世界である。
- p225 1949年〔本書出版年〕の今日、ソヴィエト連邦だけが、**決然とし、自信に満ち、組織化への一徹な意志**を持っている。その周囲の世界は、自分の抱える矛盾に身を任すだけで、**意気消沈して**生きているのだ。

## 第2節 共産主義に対する知識人の態度

- p226 ソヴィエト国家の根本目的は「搾取を撲滅し、すべての国を社会主義的に浄化すること」(1918年憲法)である。そして「一国社会主義」をまず実現しようとする道は、批判を招きはしたが、それぞれの国で労働者を結束させることができたのである。【一方】分派共産主義者は、民主主義体制の中で他傾向の活動家たちと不毛な思いを共有することになり、人々に強力な希望を与えてはいないのだ。
- p227 西側諸国の反体制勢力には、相対立する2つの源泉がある。  
【(1) ロシア共産党(一国社会主義、ボルシェヴィキ主義、スターリン主義)と(2) 反スターリン主義】
- p227 【それは】ソヴィエト連邦が1国かつ後進工業国という条件のもとに成立したからであり(マルクスによれば生産力の極限的発展の結果生じるはずであったが)、世界革命への最初の数歩と見ていたレーニンのあと、スターリンが、世界革命をロシア社会主義の前提条件とすることをやめてしまったからである。  
↓しかし、そもそも、  
**選択の余地などなかったのだ**(ただし革命を変質させ、不可解で期待はずれの相貌を与えた)。
- p228 【(1)の】個人の利益・思想・都合・権利への無視が、共産主義への強烈な憎悪をもたらしている。西側にとっては、個人が根本の重要事項であり、価値と真実は、私的生活の孤独さに関係しているのだ。  
↓だが、  
個人という民主主義的・中産市民的観念の根底には、まやかし、安易さ、けちくささがあり、さらに**運命(存在するものの宇宙的な戯れ)の要素としての人間への否定**がある。近代中産階級の人物は、人類が引き受けたなかで**最も平凡な人物像**であるように見えるのだ。  
【そして(2)の】革命家たちは、最終的には、この中産市民に共感してしまったのである。
- p230 【また】スターリン主義とヒトラー社会主義との外面的・方法的類似は衝撃的であり、【このことが】共産主義分派を中産階級に結びつけ、「反全体主義の」世論が形成されたのである。  
↓この2つの主義について(コジェーヴは)、次のような【危険かつ輝かしい】解釈をしている。
- p231 「スターリン主義は、国家的ではなく、帝國的(無政府状態を終結させる)世界国家的社会主義であり、いかなる国家も参入しうるのに対し、ヒトラー社会主義は、国家に限定され、征服した国々を組み込む手段がない」  
↓しかし、この解釈がマルクス主義と異なっているのは、  
ヘーゲルのように**決定的な地位を国家に与えている**からである。  
そして、共産主義の**民衆の現実**と真っ向から対立し、**行動的な熱狂**の外側に存在しているのだ。  
↓ただし、個人の意味の貧しさを強調する利点はある。  
個人を最終目標とは別の地点に位置づけ、広い地平に開く機会を逃すべきではないというのだろう。  
↓【その意味では、コジェーヴの解釈にも当たっている部分があるのだ】  
我々がソヴィエトの生活について知っているのは、せいぜい、限定された事業や個人の自由の制限に関係したことだ。だが我々の習慣はソヴィエトの生活では覆されているし、この生活で問われていることは、**我々が好んで閉じこもる短絡な展望を越えている**のである。
- p232 ソヴィエト連邦への単純な拒絶・憎悪は、後味として**ぞんざいな感じ**が残る。

p233 西側に生じている混沌は、精神的無力さによるのである。我々にできることは、この**ボルシェヴィキ主義の本質の探求**にのりだすことだけだ。

### 第3節 蓄積に逆行する労働者の動き

- p233 ソヴィエト連邦は直接的に世界を変えることができる。と同時にその行動の余波によっても世界を変えることができる（対立陣営の国々は経済の法的基盤を変えるように仕向けられている）。
- p234 大切なのは、世界で活動中の**力の本性**を意識することなのだ。かつて余剰資源の処理における変化（設備の発展に差し向けるようになった）が産業時代を開始させ、現在も資本主義の基礎になっている。「蓄積」の意味は、裕福な個人が非生産的消費を拒否し、手持ちの資金を生産手段の購入に使ったことである。
- p235 労働運動も分配に本質的に関係しており、富のより多くの部分を非生産的消費に差し向けることなのである。左翼の政策は、**有用性の連鎖を断ち切る荒れ狂い**というほどではないが、緊張緩和という意味は持っている（逆に右翼は打算の意味を持つ）。進歩政党を活気づけているのは**今現在を生きたい**という嗜好なのである。

### 第4節 蓄積に対するロシア皇帝の非力さと共産主義による蓄積

- p236 【しかしながらp235の考察を】ロシアに適應することはできない。1917年までのロシアは旧体制下のフランスとほとんど変わらず、蓄積することのできない階級によって支配されていたのである。
- p237 だから革命闘争は、浪費を終結させて富を設備に投資することしかできず、産業国ならば労働者を支える政党がごく自然にめざす目標（労働者への富の分配）に対立する目標しか立てることができなかったのである。
- p238 第1次大戦が明示したのは、後進国は存在できないということだった。だから**国力を発展させるという条件でしか生き延びることのできなかつたロシアにおいて、プロレタリアートの矛盾が生じたのである。つまり、生を可能にするために生を断念する**という矛盾を自らに課さねばならなくなったのだ。
- p239 ロシア人ほど中産階級の合理的長所から無縁な人間は見出せないように思われる。この合理的長所（資本家の投資）は安全性を必要とするが、ロシアは広大な平原のなかで蛮族の侵入にさらされてきたし、飢えと寒さの脅威のなか、無頓着、無情、そして今現在のなかで生きる姿勢を培うことになった。  
↓だから、  
ソヴィエトの労働者には**第三者を信頼する**必要が、**自分を縛る拘束**に身を任すことが必要だったのだ。
- p240 その上、先頭に立つ人々は、企業人の冷静で打算的な精神を持つことなどできなかった。  
↓なぜなら、ロシアは、  
農業を主体にしながら同時に軍隊の要請に支配される経済しか知らなかったからである【安全・産業・蓄積を知らなかった】。富の使用はほとんど浪費と戦争に限られていた。帝政から共産主義への唐突な変化が意味するものは、設備投資のためには戦争による需要が必要だったということである【戦争・浪費 → 戦争・蓄積】。
- p240 ボルシェヴィキのリーダーたちは、帝政下の大地所有者と同様に、恐怖と情念の世界に属していたが、初期の資本家に似て、浪費に反対した。その上、これらの特徴を労働者と共有したのである。当初におけるリーダーたちと労働者階級との精神上の一致は否めないだろう。
- p241 【将来のために我慢するだけでなく、ロシア的「今を生きる」のなかで】現時での自己贈与が鼓舞され、また戦争の脅威が強調されたため、労働と給与との差は相当なものになっている。
- p242 すべての社会組織、生命体において、**余剰資源は2つに分割される。体制の成長と純粋な消費**である。ところが減びる寸前であった国民が、突如、奢侈と惰性に委ねていた部分を最小限に削減し、生産力増大のためだけに生きようになったのだ。
- p243 1937年頃の弾圧は容赦なかった。労働者は別の工場への移動も意のままにならない。20分遅刻すると強制労働の罰が待っているのである。

### 第5節 土地の「共有化」

p246 農村部の土地の「共有化」は「工業化」との合致と見なければならない。それは「重工業優先 → 細々とした耕作工場生産物ではなくトラクターを供給 → クラークはトラクターを必要とせず → 大規模農業経営の必要」ということなのである。

### 第6節 工業化の過酷な面に対する批判の弱点

p249 問題を個別に考察しているだけでは、死刑や強制収容所の犠牲者が数百万にのぼる事態を理解できなくなる。

- 私は残虐な行為を正当化したいのではなく、理解したいのだ。恐怖政治を憎むだけで、もし彼らが柔和な対応をとっていたらもっと成功していただろう、などと主張するのは安直である。
- p250 赤軍がナチスを叩き潰すことができたのは、ロシア産業の努力の賜物だったのだ。
- p253 我々は恐怖政治よりは死ぬほうがましだと思っているのだろう。だが、人間は、たった一人で死ぬことができるが、莫大な数の民衆には、生きること以外に可能性はない。
- p253 我々を誘惑するものを取るか、資源を増大させるものを取るかの選択を迫られたとき、前者を捨てて、後者を選ぶのは辛いことだ。良好な状態にある場合には容易かもしれない。だが疲弊している場合には、恐怖政治と革命の高揚しか、我々を弛緩した状態から引き出すことができない。暴力的な刺激がなかったならば、ロシアはどん底から這い上がれなかっただろう（目下のフランスですら暴力的刺激の必要を示している。ナチス占領下の生活は、物質的な視点では、蓄積に励む必要がなかったので比較的容易だったのである）。
- p254 スターリン主義への批判が失敗したのは、支配層を大衆とは無関係なグループとみなしたからである。しかし土地の共有化政策も産業計画も、支配者の利害に対応しているものではなかったのである。
- p256 最も奇妙なのは、スターリンの政治が恐怖政治であると同時にテルミドールの反動とみなされていることだ。反対派が頑固一徹ゆえに陥っている混迷が、ここに明示されている。国家主義とマルクス主義の合体も死活問題への回答だったのだ。もしも革命が国家の成り行きに関係づけられていなかったならば、大衆が全一致で戦うなどということは起きず、革命は死を余儀なくされていただろう。国家主義が反革命と見なされていた時代にあっても、人々は、「ルスを救うために聖霊を遣わしてくれるよう神に懇願する」アリアに拍手喝采していたのである。
- p257 戦争が差し迫っているときに、国民のこれほどに深い反応を無視するのは正気の沙汰とは言えない。

## 第7節 世界の問題とロシアの問題の対立

- p258 ソヴィエト連邦は生産手段の生産に専念しており、他の諸国の労働運動に逆行している。だが、この労働運動も経済上の必要性に対応しているのである。アメリカ合衆国は、いずれ同盟諸国の産業を自国の産業と近い状況に置く力すら持っており、したがって経済問題は販路拡大ではなく、消費の問題になりつつあるのだ。
- ↓だから、
- 産業生産の法的基盤は現在のままでは維持されなくなっている。世界は迅速な変化を求めているのである。かつて地球がこれほど活気づいたことも、これほど重苦しく見えることもなかった。
- ↓もしも破局が起きてしまったら、
- ソヴィエトの方法だけが、廃墟に見合ったものになるかもしれない（そして人類は、貪欲な無秩序へのこのような完全否定を、渴望しているのかもしれないのである）。
- ↓だが、今なすべきことは、これ以上恐怖を表すのはやめにして、
- p259 この世界に立ち返り、この世界の可能性がどのようなものか見抜くことなのである。
- p260 今日西側の人々は、恐怖に怯えながら不毛な反共産主義にのめり込んで自分をむなしく蕩尽している。だが解決すべき固有の問題を抱えているのだから、行動に打って出るべきなのだ。
- ロシアの大地を深く耕す人々の凄まじいエネルギーを理解しようとするのならば、課せられている任務の近くにいることになる。というのも、あらゆるところで、あらゆる仕方で、運動状態にある世界が、変えてほしいと願っているのだから。

## 第2章 マーシャル・プラン

### 第1節 戦争の脅威

- p261 ソヴィエト連邦の外では、うめき声、聞き覚えのある言葉、無理解を証す大胆な証言、これらが力のない不協和音を奏でている。しかしこの無秩序は、その反対の事態よりは真正の自己意識の誕生に適しているだろう。それにこの無力さがなかったならば、同時に共産主義の挑発による緊張感がなかったならば、意識は自由にならないだろうし、目覚めさせられることもないだろう。
- p262 それでもやはり分離と憎悪は完璧になってしまった。それらが予告するは第3次大戦による人類破滅である。
- p263 【ロシアが勝利し】廃墟の上に確立されたマルクス主義は、革命とは何の関係もなくなってしまうだろう。
- p264 アメリカが勝利する場合には全面的に荒廃することはないはずだ。しかしアメリカには、すぐに戦争に踏み切る利点がない。他方で時間はロシアの方に有利に働くのは明瞭だ。■ソ連の原爆実験成功は1949年8月

## 第2節 生産方法のあいだの非軍事的競争の可能性

- p264 一方には、共産主義が強制収容所の恐怖によって人々に強いる沈黙がある。他方には、共産主義者を皆殺しにする自由がある。これは、**精神が目覚めるための完全な状況**である。この状況は脅威の結果だが、目覚めた意識のなかで優越しているのは、不安ではなく瞬間への確信である。  
この確信とは、**夜だけが、見たいという意志への唯一の回答**だとする**滑稽な考え**のことなのだ。  
だが、目覚めた意識は、**究極の瞬間まで、好運への冷静な探求**を手放すことができないだろう。  
目覚めた意識は、死の至福なる終局のなかで、初めて【冷静な探求を】手放すことになるだろう。  
(意識の限界体験＝「好運」の体験は、死ぬことではなく、意識が死と直面し、その内実たる「夜」を、つまり世界エネルギーの激しく恐ろしい蕩尽を「見る」ことにある。)
- p265 「経済が戦争を別の方法で続行する」という考えが「戦争＝回避可能」という思いにさせるのである。
- p266 根本的には、生産が溢れ出ている側から戦争の危険はやってくる。輸出が困難な場合、しかも他の捌け口がない場合、戦争だけが唯一、過剰になった産業の得意先になりうる。アメリカは巨大な爆発物なのだ。  
↓にもかかわらず、アメリカ人は、アメリカ経済を、  
「成長の動きに活気づけられているから存続可能であり、合理的である」と考えており、それが危険なのだ。  
↓しかし、このような悲観的な見方には、別の見解を対置させねばならない。
- p267 戦闘機や爆弾と同等の富の大量破壊が、生産品を対象になされうるのである。今や闘争は軍事的になる必要はなく、経済競争を考えることができる。この経済競争は、主導権を握る人に、戦争での犠牲に匹敵する犠牲を払わせる(資本主義的収益を伴わない消費を行わせる)。
- p268 マーシャル・プラン [1948年～51年。総額の89%が無償贈与] は、ソヴィエトの圧力に対する唯一の体系的な企画であり、計画経済の蓄積に対して余剰を組織化してぶつけているのである。
- p269 2つに1つなのだ。世界の生産設備の整っていない地域がソヴィエトの計画経済によって工業化されるのか、アメリカの余剰がこれらの地域に設備投資するのかである(しかし後者の成功が真の希望を残している)。

## 第3節 マーシャル・プラン

- p270 マーシャル・プランは、アメリカに対するヨーロッパ諸国の赤字を修復しようと試みているが、この赤字は今に始まった話ではない。その大部分は、金の流出で相殺され、残りは貸し付けで埋め合わされていた。今日ではこれらの抜け道が失われてしまったのである。
- p271 この甚大な経済不均衡の意味は何か。米国が利益の原則を維持していくなら、その帰結を耐えねばならない(すべての国から憎悪される)。これを避けるためには、支払いとは関係なしに商品を引き渡すことが必要なのだ。

## 第4節 「古典派」経済と「全般的な」操作の対立

- p273 ブレトン・ウッズ協定 [1945年から米ドルと他国通貨の交換額を一定にした] は「古典派経済」に沿ったものであった。つまり「個別の計算から発し」、「周辺の人々に生じる影響」は考慮に入れないということである。  
↓しかし、これを断念しなければならず、
- p274 マーシャル・プランのポジティブな特徴を際立たせたのである。
- p275 フランソワ・ペルーは、マーシャル・プランの定義を的確に導きだした。このプランは「世界的な利益のための投資」であり、「巨視的な政治選択と計算に基づいて決定」され、「この需要と供給は**連結決算**でなされ、古典派の教説・実践とは対立している」のである。  
↓そして、
- p276 諸国家も諸地域の相互理解による利益を優先するよう促され、アメリカ合衆国を「近隣の諸単体に基づかせる」動きが、各地域の経済を世界全体へ統合することになる。  
↓すなわち、
- p277 地球全体で考えると、**人類は、もはや利払いも、返済期限を守る必要もなしに、人類自身の目的のために信用貸し付けを用いるようになる**ということだ。人類は、経済協力局の一人のマネージャーに成り変わり、利潤規定の否定という基本法に従いながら、絶えず交渉を行って投資を分配することになる。この新たな基本法を表わす格言はおなじみのものだ。「各人からはその生産能力に応じて。各人へはその生活の必要に応じて」。

## 第5節 フランソワ・ペルーの語る「全般的な」利益から、「全般経済学」へ

- p279 以下では理論的考察を導入して、この財政支援の特徴を検討してみたい。

- マーシャル・プランは、資本の投入を利潤の一般原則から切り離して行うことを、第一の前提にしている。また、数十億ドルの援助はヨーロッパにとって死活の重要性を持つが、米国の1947年のアルコール消費額より少なく、だいたい3週間分の戦費に相当し、アメリカの国民総生産の約2%である。
- p280 もしこの2%がマーシャル・プランではなく、アメリカの富の増大に用いられ、それが**個別の要求**を満たしたとする。このことが**全般的に【全般的観点から】意味するもの**を考察しよう。  
【まず】**個別の利益**【と言われているもの】は、自然界の各単体が増加の傾向にあることを意味している。実際に、どのような生命体も、余剰資源を生殖による増加へ、あるいは自身の成長に活用することができる。だが、この増加への欲求【なるもの】は、個別の利益から全般の利益を考察する**習慣的な見方**にすぎないのだ。  
↓しかし世界はそれほど単純ではない。
- p281 この間違いを感じとらせるのは容易だ。粒子状の生命体の増加は、全体として考察してみると無限ではありえないということである。**生命に開かれた空間には飽和点がある**。活動力に対して空間が開かれていても、その開かれ方は生命形態の本性に応じて変わりうる。翼のおかげで鳥はより広い空間を増加のために開いてきた。同様に、人間はその技術のおかげで、エネルギーを消費し生産する体系面で躍進を続けることができた。  
↓だが、
- p282 **この成長の動きは、生命のすべての段階で限界に衝突する。絶えずストップをかけられるのだ**。  
そして再出発のために、生命の様態の変化を待たねばならないのである。  
↓ところが成長が停止しても、資源はなくなるわけではなく、したがって、残った資源（エネルギー）は、純粋な消失として消費されていくのである。  
一般に認知しておくべきなのは、生命あるいは富は無限定に豊饒であることができず、成長をやめて**消費に転じなければならない瞬間が絶えずやってくる**ということである。  
**死のない単細胞生物の強烈な繁殖に続いて、死の、そして有性生殖の奢侈（贅沢）**が起きる。ある種の**動物が別の種の動物によって食べられる**ことは増加へのブレーキになる。同様に人間も、生存ための空間をそこに住む動物を犠牲にして支配すると、あとは戦争および無益な消費に向かうようになる。人類は、産業によってエネルギーを生産力の発展に活用し、増加の可能性を多様に開設する。と同時に、純粋な消失として蕩尽を行う能力を際限なく持っているのである。  
↓だが、増加は個別の欲求としても考察しうるのであった。
- p283 実際に個人は、増加の限界など推し測らず、増加のために辛い戦いも辞さず、その結果に心を配らないのだ。  
↓しかし逆に、全般的な視点が存在するのである。  
この視点から、生命が新たな姿で考察されるようになる。この視点は、個人の無分別さに（そして絶望に）、**奇妙で溢れ出るような富**の感覚を、**好ましいと同時に悲惨な富**の感覚を対置させる。この全般的な視点はある経験から得られるものだ。それは、自分の個人的力を伸張させて我が物顔に振舞いたいと欲する、その**欲求の空しさへの意識**のことなのだ。  
↓まとめるならば、
- p284 「古典派」経済のように利潤の追求に制限されている問題は個別問題であり、逆に全般的な問題においては、余剰エネルギーを破壊していかねばならない生きた集合が、再登場するということである。
- p284 マーシャル・プランは「古典派」タイプの個別の投資に対立しているが、集団的な**連結決算によってのみ**対立しているわけではない。この計画は、**ある一点で、生産力の増大を放棄している**。まさにこの点で全般的な問題の解決へ向かっているのだ。
- p285 この計画は同時に増加への最終活用【「最終的には増加への活用」】になることを企てている。  
【しかし】全般的な視点は、利益が上がる投資が退けられることを、求めるのである。

## 第6節 ソヴィエト連邦の圧力とマーシャル・プラン

- p287 マーシャル・プランは、ソヴィエト連邦への**好都合な恐怖**がなかったら、存在しなかったものなのだ。  
【言い換えれば】クレムリンの外交手腕がアメリカの国庫の鍵を握っているのである。
- p288 ソヴィエト連邦の政治行動は世界経済に必要なのである。つまり、その体制が資源の不均衡を表現しているであり、階級闘争の緊張はその不均衡をなくし、不均衡が麻痺させていた富を流通させるために好都合なのである。プランは、労働者のアジテーションを西欧の生活水準の向上によって取捨させようとしたものなのだ。  
↓そして、両陣営の矛盾に満ちたやりとりは、
- p289 世界の対立は戦争によって解決されるとは限らなくなることを、立証しているのである。  
一般的に、労働者のアジテーションは、経済制度の革命を介さない平和な進展へ向かう。【ただし陥りやすい】間違いは、穏やかな改良主義的アジテーションだけがこのような進展をもたらすと信じてしまうことだ。アジテーションが脅威の外観を帯びなくなれば、進展などなくなってしまうだろう。

↓しかしまた、

共産主義の唯一の幸福な結果は権力の奪取だとするならば、これも間違いなのだろう。

マーシャル・プランのような試みの効果はそれだけで重大である。しかし、共産主義側からの経済競争は、富の分配における変化を越えて、もっと根源的な構造の変化を簡単にもたらすことができるはずなのだ。

#### 第7節 あるいは戦争の脅威だけが唯一「世界を変える」力を持ちつづける

p290 マーシャル・プランは生活水準の世界規模での向上をめざしている。しかしそれは**資本主義の外部にある手段**なのである。かくしてソヴィエト連邦と大差ない構造への横滑りが始まる。アメリカ合衆国は、自由な事業を擁護しているが、一方で国家の重要性を発展させている。そうしてソヴィエト連邦が一気に飛込んだ地点へ、ゆっくりと進み続けているのである。

p291 今後は、戦争とは別の政治が第一義の重要性を持っているのだ（それは唯一のチャンスである）。確かに、しばしば戦争が社会の進展を加速させてきた。ソヴィエト連邦も、我々の**精神の自由、柔軟になった社会関係、国有化されたサービス機関も2度の戦争の結果**なのだ。第2次大戦が終わったとき、我々の人口は増加させしていたのである。■約3億(西暦元年) → 約16億(1900年) → 25億(1950年) → 80億(2022年)

↓だが我々は平和裡の進展を考慮に入れねばならない。さもなければ、資本主義の破滅がその制作物の破滅に、産業発展の停止に、そして社会主義の夢の消滅になってしまうだろう。昨日までは、戦争に期待するのが致し方のなかったことを、今後我々は、**戦争の脅威**に期待しなければならない。これは心安らかなことではないが、選択肢は与えられていない。

#### 第8節 「ダイナミックな平和」

p292 我々は、政治判断の基底にある明瞭な原則を考慮に入れること**だけ**にしておかねばならない。もしも脅威のせいで、アメリカ合衆国が余剰部分を軍事産業に差し向ければ、まちがいなく戦争が起きる。脅威のせいで、アメリカ合衆国が余剰の部分を見返りを求めずに、世界的な生活水準の向上に差し向けるならば、唯一その限り、人類は平和裡に問題の全般的な解決へ向かうだろう。

p293 非武装は政治宣伝であって捌け口になっていない。だが【アメリカの余剰が爆発した】その際には、ソヴィエトの**政治のせい**だと語られるかもしれない。しかしこれは欺瞞である。力の余剰に戦争の捌け口だけを残しておくのは、戦争の責任を背負う、ということなのだ。

↓だからといって【私は】、非武装の方向へ進むことをよしとしているわけではない。

非武装は非現実的なのだ。あまりに可能性から遠いため、その結果を想像することすらできない。

p294 今の世界を休息へ促すことがいかにむなしいか、人々は推し測ることができずにいる。【休息ではなく】ダイナミックな平和だけが唯一必要性に答えているのだ。**ダイナミックな平和**という言葉こそ、ソヴィエトの人々の**革命的な意志**に対置される唯一の言い回しなのだ。この決然たる意志が、**戦争の脅威の状態を維持**し、さらに**対立陣営の軍事武装をも維持**すること、ダイナミックな平和はこのことを意味している。

#### 第9節 アメリカ経済の成就に関係した人類の成就

p294 アメリカの方法の成功だけが世界の平和裡の進展をもたらす。

p295 クレムリンの政治に悪業の具現を見てとる必要はない。ソヴィエト連邦によって維持された**緊張の意義、真実、重大な価値**を見抜かないのだったら、**自己意識**を欲してもむなしい話になるだろう（もしもこの緊張がなくなれば、**静穏な生活はむなしくなる**だろうし、かつてないほどに恐怖に駆られるようになるかもしれない）。情念にただ動かされて盲目になり、ソヴィエト連邦に常軌逸脱しか見ずにいる人は、彼自身、少なくともその盲目ぶりにおいて同等の常軌逸脱に身を任せているのだ。

**完全な明晰さによって人間は最終的に自己意識になる好運にめぐまれる**のだが、この人はそういう明晰さを放棄しているのだ。もちろん自己意識はソヴィエト圏内でもこの人に劣らず排除されている。そもそもこの自己意識は既存の何ものにも結びつくことがない。脅威の衝撃を受けると、この自己意識は、急速な変化(1)をもたらし、さらに世界の支配的な部分の勝利をもたらす。他方でもうすでにこの自己意識は、アメリカ民主主義の将来の選択のなかにもたらされている。そしてその選択の戦争なしの成就をただひたすら求めている。ここではもう国家の視点は問題外だ(2)。

原注 (1) 合衆国内部の急速な変化が、労働組合勢力の急激な上昇から期待できる。

(2) 米国以外の国々から発する、深い意味での**独立のイニシアティブ**はもはや存在しえない。

## 第10節 富の最終的目的への意識と「自己意識」

p296 これらのまったく外的な要因に、自己意識の真実（何にも還元できない**至高性**へ存在が帰って行くこと）のような内的な真実を関係づけるのは矛盾したことだ。しかし本質に立ち返ってみるならば、これら外的な要因の深い意味（本書全体の深い意味）を見抜くことができる。

p297 最初から矛盾は極まっている。「支配的になった国際経済」に基づいた政策が、世界の生活水準を高めることしか目的に掲げていないのだから（2）。

↓しかしこれ【この矛盾】は、自己意識の出発点である。

**自己意識**は本質的に**内奥性の完全な所有**なのだが、しかし人は、いかなる**内奥性の所有**もまやかしかだという事実に帰っていかねばならなくなる。

↓たとえば、

供犠は一個の聖なる**物しか呈示できない**のだ。聖なる物は内奥性を外在化させる。聖なる物は、本来、内部にあるものを外部へ顕示する。

↓それゆえ、自己意識は、最終的に、

内奥性の次元でもはや**何も起きなくなる**ことを要求するのだ。

↓つまり、

**冷徹な明晰性が聖なるものの感情と合体する一点**が露呈されねばならないということなのだ。

↓そのためには、

純粋に**物に対立**している**要素**へ、**聖なる世界を還元**することが、まず前提として必要なのである。

↓このこと（冷徹な明晰性と聖なるものの感情の合体）は、実のところ、

神秘家たちの体験と同じように、知的で「形態も様態もない」観照へ帰着する。様々な「**幻視**」、**神々**、**神話**が呈する魅力的な**外見に対立した観照**である。

↓そして、他方でこのことは、

本書で導入した角度から眺めると、議論に決着をつける意味を持つ。

↓すなわち、

p298 我々存在たちは、エネルギー資源の増加に差し向けられている。我々存在たちは、大部分の時間、ただ同じように存続しているのではなく、この増加を自分たちの目的と存在理由にしているのである。

↓だが、このように増加に従属していると、

自律性を失ってしまうのだ。現在の自分を、将来成るはずの自分に従属させているのである。

↓だが本当は、このエネルギー資源の増加は、

この増加が純粋消費へ解消する瞬間との関係において位置づけられねばならないのだ。

↓とはいえ、これは困難な移行であり、意識はこの移行に反対するのである。

というのも**意識は、純粋消費の無ではなく**、何らかの獲得できる対象を、つまり**物を捉えようとする**からだ。

↓したがって重要なのは、

**意識が何らかの物への意識**であることを**やめる瞬間**へ到達することなのである。

↓言い換えれば、

増加（何らかの物の獲得）が消費へ解消する一瞬間の決定的な意味を意識することということである。

これこそが、まさに**自己意識**なのである。つまり、もはや対象として何ものも持たない意識なのである。

↓そして、

p299 このような完成は、**明晰性が運よく発揮される**ところでは、社会生活での配備（しかるべき場所に人や物を配置すること。ここでは、アメリカの余剰をしかるべき地域に移動すること）という価値を持つ。

↓この配備は、ある意味で、

**動物から人間への移行**に相当する（この移行の最終的な行為である）。

↓こうした見方からすると、まるで最終目標が与えられているかのような感じになる。

今日トルーマンは盲目的に、終幕の準備をしているのかもしれない。

↓だが、これは明らかに錯覚なのだ。

もっと開かれた精神は、時代遅れの目的論の代わりに真実を見出す。沈黙だけが裏切らない真実を。

原注（2）トルーマン・プラン [1949年1月。発展途上国援助計画] は、マーシャル・プランよりも意義深い。これらの政策は**戦争の必要性**を取り除くだけで、**戦争の可能性**を取り除くわけではない。だがこれだけで十分かもしれない。いずれにせよ、人はこれ以上のことはできないだろう。

I. 古典派の有用性原理は不十分だ

p 305 現代人の考え方には「人間にとって何が有用なのか」を決定する手段が欠落している。

↓たとえば我々は、

**有用なものと快楽の彼岸**に位置づけようとする**原理**(名誉とか義務の原理)を不当な仕方であてつけ、**名誉や義務**の原理を、**金銭的利害関係**のなかで、偽善的に使用しているのである。

↓そして、

神はもちろん、**精神**もまた、**閉ざされた体系**を拒む人々の、知的な戸惑いを**隠す**のに役立つのである。

p 306 古典派の有用性は理論上は**快楽**を目的にしているが、財の獲得と保存、生命の増殖と維持に限定されている。  
p 307 一連の数量的経済表現は、このような平板な考え方に関係しており、唯一、生殖の問題だけが深刻な議論を巻き起こしている(個人の分け前を減少させる危険があるから)。

↓しかし全体的には、

「個々人の努力の価値＝生産と保存」という原理が、暗黙の内に支持されているのだ。

芸術、風俗営業、賭け事が問題になるにしても、**快楽は2次的な役割**しか持たない**休息**に帰せられる。

↓確かに、

理由なく浪費し破壊できる若者は、こうした発想を否定している。だが、頭脳明晰な人でさえ放蕩に耽って**自分を破滅させる**ことがあるのに、そうなったとき、**なぜこんなことをしてかしたのか**分からず、自分を病人だと思ったりするのである。

この人は功利的な視点から自分を正当化できないし、ましてや「人間社会もまた、破滅や膨大な損失に興味を持つことがありうる」という考えを思い浮かべることがない(それは**確固とした欲求に応じて**、ふさぎ込み、不安の発作、乱痴気騒ぎを引き起こすようなものなのだ)。

p 308 日常的発想が社会の欲求に対立している様は、父親が狭量にも息子の欲求充足を阻んでいる光景を、耐え難いほどに想起させる。息子は、恐ろしいことは何も考えていないと、父親に信じさせておかねばならないのだ。

■「「お前、馬鹿げたことをするのは、うんと楽しめることだけになさいよ」。これは息子に語られた言葉としては最も賢く、母親らしい言葉である。」『善悪の彼岸(ニーチェ)』■

↓しかし、

p 309 人類は、実際には、あきれほどの野蛮さを求めている、その欲求を満たすように振る舞っている。**人類は恐ろしいことの近くでしか存続できない**ようにも見えるのだ。それゆえ既成権威の破壊に生涯を捧げる人の魅力に感化されると、平和な打算的世界が安直な幻想にすぎないと思うようになるのである。

p 309 大衆向けの世界のイメージが曖昧で意気あがらないのは歴史的に必然であり、やむをえない。ただし大衆は、わずかな**誤り**であれ誤りなしには行動していないし(この誤りを麻薬のように用いている)、それでいて自分が人間の矛盾の迷路のなかにいるとは認めがたらないのだ。

↓だから、

教養教育を受けていない人々にとっては、極端な単純化が攻撃力を減退させない唯一の手だてになる。悲惨で貧窮した生活がこうした単純化の温床だが、彼らの認識には限界があると見るのは卑劣なことだろう。

↓そして、

彼らより独断的でない発想が【秘教】のような状態を強いられ、しかも病的な反感に直面しているが、そうした反感は、ある世代の恥すべき態度＝反逆者が**自分の言葉の騒がしさを恐れている**態度なのである。

II. 損失の原理

p 310 人間の活動は、生産と保存に全面的に帰せられるわけではなく、出費も2つの分野に分けられるべきである。

(1) 生殖と保存に帰せられる出費……生命の保存および生産活動の存続のために必要最小限を使用。

(2) 非生産的消費……奢侈、葬式、戦争、礼拝、モニュメント、賭け事、芸術、倒錯的性活動。

p 311 (2)の活動はそれ自体のなかに目的を持ち、真の意義を持つためには、損失が多大にならねばならない。

この損失の原理＝無条件の消費の原理は、日常経験によって明示できる。

1) 宝石は美しく輝くだけでは十分でない。一財産を犠牲にすることが必要なのだ。このことは精神分析では**宝石の象徴的価値**と関係づけられる。無意識において**宝石は、排泄物**と同様に、傷口から流れ出る**呪われた物質**なのである。そして誇示的な供犠に差し向けられた**自分自身の部分**なのである(だが実際には性愛のための贈り物になっている)。



- p312 2) 礼拝は供犠のために人間と動物の流血を必要とする。聖なる事物は、何かを損失する行為によって形成されるのである。特にキリスト教の成功は、人間の不安を損失と零落の表現へ導いた十字架刑によって、説明がつくはずだ。
- 3) 様々な競技において様々な損失が生じる。相当額が競技場、動物その他に消費される（また死の危険が強烈な魅惑を生み出す）。常軌を逸した金額が賭けとして損失へ投じられるが、それは解き放たれた情念の代金と見なされる。その上、非生産的消費が付随する（競馬には社会階級化が伴い、贅沢なファッションも生産される）。だが、現代の競技は、ビザンティン人のそれに較べたら物の数ではないのだ。
- p314 4) 建築物、音楽、舞踏は、現実の消費であり、彫刻、絵画、文学、演劇は、象徴的な消費である。

### III. 生産、交換、非生産的な消費

- p316 消費と生産・獲得の関係は、目的と有用性関係として提示される。生産と獲得の【変化】を知ることが歴史を理解する条件だとされているが、生産と獲得は、消費に従属した手段でしかない。どんなにひどい貧困も、社会を、**保存への欲求（この欲求【なるもの】が生産を目的のように見せている）**を非生産的消費への欲求に勝るように仕向けたことは、かつて一度もなかったのである。

↓そして、

- p317 非生産的消費の優越を維持するために、無益に消費する階級によって権力が行使され、貧困層は社会活動から排除されてしまった。だから貧者は、権力の圏内へ戻る手段としては、権力を占有する階級への**革命的な破壊**、つまり**流血の社会的消費**しか持たないのである。

- p317 生産と獲得の二次的性格は原始経済制度のなかではっきり見てとることができる。**交換は、消費の過程として存在している**のであり、この過程の上に獲得の過程が発展したのである。

↓ところが、古典派経済学は、

原初の交換は物々交換だと考える。しかしそれは、交換の起源が破壊と消失の欲求にあることなど、想像すらできなかったからである。伝統的な考えが打破されたのはごく最近だったので、いまだに多くの**経済学者が、物々交換を高い取引の原点だと勝手に思い続けているのだ。**

- p318 物々交換という**人為的概念**と対立させるかたちで、マルセル・モースは交換の古風な形態をポトラッチの名の下に確定した。これはアメリカ北西部のインディアンからの借用語だが、彼らは最も注目すべき形式を提供してくれたのだ。

ポトラッチは膨大な財の贈与からなる。相手を侮辱し、挑発し、強制する目的で財が誇示的に贈られる。**交換価値は次のような事情から生じる**。すなわち受贈者は、侮辱を拭き消し、挑発を受けて立つために**さらに膨大な贈与によって（つまり高利子付きで）返礼しなければならぬ**という事情である。

↓だが、贈与がポトラッチの唯一の形態というわけではない。

- p319 財を破壊することによっても相手に挑むことができるのだ。この究極の形態を介して、ポトラッチは宗数的な供犠と出会うことになる。というのも**破壊は、建て前の上では、受贈者の神話上の祖先に捧げられている**のだから。トリンギト族の首長が、相手の眼前で何人かの奴隷の喉をかき切って殺すということがあった。この行為は、決められた期日に、より多くの奴隷の喉をかき切ることによって返礼を受けたのである。

- p319 シベリアの北東部奥地のチュクチ族は、橇用の犬の群れを殺した。アメリカ北西部では、村を焼き払ったり船団を叩き壊したりするところまで行っている。紋章入り銅製インゴットも叩き割られたり、海に投げ捨てられたりする。祭儀特有の熱狂が所有物の大量破壊や贈与物の積み上げを後押しする。その意図は相手を驚かせ、几俗に見せることにあるのだ。

- p320 返礼ポトラッチの際の超過物は、交換の**起源史**において、**利子付き貸し付けを物々交換**に取って代わらせた。実際、ポトラッチにおける富は、銀行文明における融資の増加を想起させる。つまり、利子付き返礼の義務ゆえに贈与者が所有することになった富は、一度に現実化できないということだ。

↓だがこうした比較は、ポトラッチの**二次的な性格**を対象にしている。

- p321 ポトラッチが意義深い価値を持つのは、損失によってポジティブな特性が形成されるからなのだ。この**損失から気高さ、名誉、階級制度における地位が生じる**のである。

精神分析が描く無意識において贈与は排泄行為を象徴している。そして排泄行為は、肛門性交とサディズムの根本的結合に応じて死に関係しているのである。メラネシアでは、贈与者は、競争相手の足下に置く贈り物を自分の排泄物だと見なすのである。

- p322 ポトラッチによる獲得の帰結は、消費の意図しない結果でしかない。モースによれば「理想はポトラッチを行って返礼されない」ことである。この理想は対抗処置が知られていない激しい破壊によって実現される。

↓他方で、

ポトラッチの**獲得物は、事前に新たな【再返礼】ポトラッチに組み込まれている**ため、富の古風な原則〔富

が無益に消費されること)は、そのままに明示される。

↓また、

賭という面でもポトラッチは、保存の原則の反対物なのだ。所有が世襲化しているトーテム経済においては財産は安定状態にあるが、ポトラッチはこのような安定に終止符を打つ。ポトラッチは、一種の儀式的な、それも錯乱した形式のポーカールールを出現させたのだ。しかもここでの賭博者たちは、一財産できたら身を引くなどということはできない。財産は損失への欲求にただ従うばかりになっているのである。

#### IV. 富裕層の消費の役割

p 324 商業経済において交換過程は獲得の意味を持っている。財産は比較的安定し、そして非生産的消費の体制に從属するようになったのだ。消費は、依然として地位の獲得と維持に差し向けられるが、別の人に地位を失わせる目的は持たなくなった。

↓しかし、誇示的な損失は【やはり】富【の役割】に結びついているのである。

搾取がまだ微弱な社会においても生産品は富裕者たちへ流れていくが、これは彼らが果たしていると見なされる保護・運営の任務ゆえだけでなく、**負担しなくてはならない見世物的消費**ゆえのことでもあるのだ。

p 325 富の義務的な役割が消えたのは比較的最近のことではない。異教が衰退し、富裕なローマ人たちが負担していた遊興と礼拝も衰退した。それゆえ人の主張するところでは、キリスト教は所有者の社会的役割を廃止し、所有の個人化を進めたということになる。【しかし】「義務としての社会的役割」と言うべきであろう。

↓なぜならキリスト教は、

風習が規定していた消費に代えて、自由な施し(貧者への施しや教会・修道院への寄付)をもたらしたからである。そして中世になると教会と修道院は、見世物の主要な部分を引き受けたのである。

今日では、非生産的消費の大規模で自由な形態は消滅した。だが、消費が経済活動の終局【最終目的】でなくなったと結論を下してはならない。

p 326 富がある程度発展すると、その兆候は**病いと疲れ**という意味を持ち始めるが、富の発展はさらに**自己羞恥**に行き着き、同時に卑劣な**欺瞞**に行き着くのである。

↓というのも、

気前がよく、度外れのものとはなくなったが、それでいて**ライヴアル意識**が今でも個人の活動を特徴づけており、暗々裏に心の中で膨んで、恥ずべきゲップのように出てくるのである。

中産階級市民、サラリーマン、小商人が誇示的消費を卑俗化させてしまったのだ。消費はいわば細かく分散されてしまい、残っているのは怨恨感情につながった、虚栄心いっぱいのがきだけになったのだ。こうした茶番劇が、社会を革命の破壊へ捧げる勇気のない人たちの、**生き、働き、悩む理由**になってしまったのだ。

p 327 嫉妬が、未開人そっくりの粗暴さで発露される。現代の中産階級とかつての貴族階級との違いは、前者が自分のためだけに、自分の階級の内部においてだけ、他の階級の目から隠しながら消費する点にある。

この屈辱的な考え方に、18世紀以降中産階級が発展させた「合理的な=エコノミックな=安上がり」の考え方が呼応したのである。

p 328 消費への憎悪は恐るべき**自己欺瞞**の原理にもなっている。中産市民は封建社会の浪費を批判材料として利用したのだが、権力を奪取したのちは自己隠蔽に拠ることで、支配できると信じたのだ。【しかし】その浅ましい表情を隠すことはできなかった。その顔は、気高さがなく、獐狂であり、ひどく卑小だったので、人間の生活全体が品位を落としてしまったと思えるほどだった。

↓だから、

民衆は消費の原則を根源的に維持せざるをえなくなった。中産市民の生活を人間の恥として、不吉な無化として、見ていたからである。

#### V. 階級闘争

p 329 階級闘争の構成要素は、古風な段階以降の消費の過程のなかに存在している。ポトラッチにおいて富裕な人間は貧しい人々が提供した物品を贈与するが、この消費は、分離へと行き着く競争的行為だったのである。

p 330 【そして】近代社会は、富裕な人間が創出した、この奴隷への道となる零落と汚辱のカテゴリーを受け取り、労働者階級に割り振ったのである。

↓たしかに中産階級の社会は、

この社会固有の動きによって、ある種の人間の同質性の実現にも向かっている。

この社会は、労働者に対して雇い主と同等の権利を与えてはいる。

↓しかし、

それでいて雇い主たちは、雇用した人々の汚辱にはいささかも関わっていないことを示すのに腐心しているのだ【低劣さ】。

労働者の活動の目的は生きるために生産することにあるが、雇用者の活動の目的は労働者を零落へ差し向けるために生産することにある。というも、雇い主の消費の在り方は、**人間の低劣さの上へ雇い主を高める**ことをめざしているからである。

p331 上流階級は自分の破滅を認知する力をもはや失っている。

↓なぜなら、

貧しい人間の破滅が現実化してしまうと、**富裕な人間の快樂**はその内実を失っていくからである。

快樂は一種の無気力な無関心になってしまうのだ。

↓だから、状況を維持するためには、

新たな消費（例えば慈善事業）による埋め合わせが有効なのかもしれない。

たとえばアングロ＝サクソン系の国々、とりわけアメリカ合衆国では第一次過程の競合型消費は、もはや国民の比較的わずかな部分が犠牲になるだけで生じており、労働者階級もある程度、この消費に加わるように促されたのである（黒人階級＝汚辱と見なされる既存の階級の存在が奏功するのだ）。

↓だが、このような逃げ道は、

p332 人間を高貴な階級と下劣な階級に分ける根本的な分離にいささかも変更を加えていない。人を蔑むような富裕者の栄華が下層階級の人間性を破滅させ低落させるのである。

↓付け加えるならば、

主人の粗暴さへの軽減策（破壊行為そのものよりも、**その心理的傾向に向けられる**）は、近代を特徴づける一般的な**萎縮**＝古代の消費の萎縮に呼応しているのである。しかし階級闘争は、社会的消費の壮大な形態になるであろう。

■「小羊たちが「この猛獣は悪い。その反対である小羊が善い」と仲間うちで語り合う。力とは、欲動、意欲、作用そのものである。ところが民衆の道徳は「主体」を利用し、「猛獣は小羊になることができる」などと言うことによって、猛獣に罪を着せることができるのである。この種の人間は「主体」というものを信じることを必要としているのだ。」『道徳の系譜学（ニーチェ）』■

## VI. キリスト教と革命

p333 貧者たちにできたことは、反逆を別にすれば、抑圧システムへの精神的参加を拒否することだった。彼らは、現実よりも衝撃的な象徴を用いることによって、《人間の本性》全体を醜悪な次元にまで引き下げることに成功した（犬儒派）。この醜悪さは恐ろしいものだったので、貧窮者の惨状を推し測る**富裕者の快樂**は、突如鋭利になりすぎて耐えられないほどになったのである。

↓それゆえ、

この貧者の発作的な痙攣に対し、宗教的な絶望が解決策を打ち出したのである（初期キリスト教）。

宗教生活の高揚感と不安感、刑の苦しみと乱痴気騒ぎの交錯は、より悲劇的な1個のテーマ（イエスの死）へと組み替えられ、病的な社会構造と合体していった。しかも社会構造も、自らを引き裂くことになったのである（ローマ帝国内対立）。

p334 キリスト教徒が神を讃えるのは「権力者たちを高みから突き落とし、貧者たちを称揚した」からなのである。

キリスト教は、拷問にかけられた人の社会的な不名誉、死体となったその零落ぶりを神の栄光に結びつけた。

p335 キリスト教の意義は、現実の闘争に背を向けた精神上の競合型乱痴気騒ぎにあるのだ。

↓だがそれは、

**高貴な人々**に対する**下劣な人々**の、純粋な人々に対する不純な人々の、歴史的闘争の1エピソードにすぎない。

あたかも自分の耐え難い分裂を意識した社会が、一時の間、この分裂を加虐趣味的に享受するために、泥酔したかのようになったのである。

■「高貴な強い人々が、自らと自らの行動を、下劣な者たちとは違って〈良い〉と感じたのである。」

「有用性などは無視したのだ。計算する狡猾さ、微温的な感情とは全く反対の感情が働いているのだ。高貴さは、低い類型に対して高位の類型の者たちが感じる持続的で支配的な感情なのだ。これこそが「良い」と「悪い」という対立の起源である。」『道徳の系譜学（ニーチェ）』■

↓しかし、

p336 披搾取階級が弥増す**明晰さ**で上流階級に対立するときには、その憎悪にはいかなる限界もないのだ。

↓なぜなら、

搾取者たちの役割は、人間の本性を排除して侮蔑的な生活形態を創出することにあるのだから。

階級闘争には一つの可能な結末しかない。《人間の本性》を破滅させることに努めてきた人々の破滅である。

↓ただし、

18世紀前にはキリスト教徒の宗教的恍惚によって、今日では労働運動によって生じた社会全体の痙攣は、**次のような事態へ社会を強制する決定的な衝動**として表現されるべきなのだ。

↓すなわち、

p337 社会が階級相互の排除を活用して、一方では可能な限り悲劇的で自由な消費の様式（プロレタリア革命）を実現し、同時にまたすぐれて人間的な聖性の形態（脱キリスト教的・無神論的な宗教的儀式）を導入するという事態である。

まさしくこれらの動きの太陽回帰的な性格こそが、労働者による革命の人間の価値すべてを説き明かす。労働者による革命、それは、まさに単純な生命体を太陽へ向かわせるのに似た強制力をもって、革命自体へ人を惹きつけることができるのだ。

## VII. 物的事柄の不服従

p337 人間の生は、法的な存在とは違って、宇宙空間の中の孤立した一球体の上で昼から夜へ、地域から地域へ、生起している。人間の生は、理性的な発想によって課せられた**閉じた体系**には限定されないのである。

少なくとも人間の生が容認している秩序と保存に関わるものは、**会計報告**できるような何ものにも従属しない目的に向けて、解放され消えていく時に初めて意味を持つのである。

p338 人類が孤立しなくなるのは、このような、**哀れでさえある不服従**によってのみのことなのだ。

↓しかし人間は、消費の諸過程に、つねに組み込まれているのである。

その際の興奮は、はっきりと同じ水位で維持され、集団なり個人なりを活気づけている。その興奮は、合理的に使用できたはずの、物的あるいは精神的財を投げ棄てる、非論理的で抗いがたい衝動として定義されうる。

↓そして、

こうして達成された損失に結びつくのが、非生産的価値の創造である。

この価値のなかで最も不条理で、なおかつ人々を渴望させるのが**栄光**なのだ。

この価値は、**零落**によって補われるのだが、絶えず社会的生活を**支配**している。

↓しかも、

この価値なしには何も**企てる**ことができないというのに、この価値それ自体は、損失の**盲目的**実践が実現の条件になっているのである。

↓それゆえ、

p339 莫大な廃棄物（非生産的消費）が人間のさまざまな**意図**を世界の**物質の動き**へ、それも量ではなく**質**を表わす動きへ、**巻き込む**のである。

じっさい**物質**は、非論理的な種差によってのみ定義されうる。この種差は、ちょうど**法**に対して**犯罪**が表わすものを、世界の**経済**に対して表わしているのである。

**栄光**は、自由な消費の対象を要約あるいは象徴している。**栄光**は、**不従属の「質の表示」**なのである。

↓他方で、人間集団は、

p340 歴史の動きによって実現される**質的变化**に価値を結びつけており、その価値は栄光の価値と合致している。

もしも人がこの価値のことを思い描くようになるならば、つまり、**歴史の動きは制御したり、限定された一個の目的に差し向けることができないもの**だと思い描くようになるならば、有用性を相対的な【ものとして】設定できるようになるだろう。

人間は自分の生活の糧を確保する。あるいは苦痛を回避する。こうした行動が十分な結果をもたらすから人間はそうしているのではない。自由な消費の不従属の役割に到達するため、このためにこそ、そうしているのである。

## ■『言葉と物（フーコー）』から■

18世紀末以前に《人間》というものは実在しなかった（p328）。《人間》とは、経済学と文献学と生物学の法則に従って**生き語り労働する**個体、しかも、それらの法則を明るみに出す権利を手にしたとでも言うような個体（p330）である。存在と表象が共通の場を見出していた古典主義時代の《言説》が消えたとき、《人間》は、知にとつての客体であるとともに認識する主体でもある、その両義的立場をもって現れたのである（p332）。したがって近代の思考は、**思考されぬものを思考せねばならぬ**という法則に貫かれており（p347）、この思考にとって、ありうべき道徳などというものはない。なぜなら、19世紀以来、思考はすでにその固有の存在においてそれ自身の「外へ出て」いるのであり、もはや理論ではないからだ。それは、解放し、そして隷属させざるを得ないのである。思考は、その実存とすれすれのところにあつて、もっとも初期のその形態をとるやいなや、それ自身が行動、危険な行為となるのだ。サド、ニーチェ、アルトー、**パタイユ**は、そのことを知っていたのである（p348）。